

北水試 百年 こぼれ話

⑤昭和30年の職員写真

吉田 英雄

キーワード：昭和30年北水試・北水研職員写真、ガラス製乾板、エピソード、酒井写真場、酒井忠康、短編童話、海にかえる魚



写真1 昭和30年北水試・北水研職員写真（余市町浜中町の北海道立水産試験場・北海道区水産研究所庁舎前にて）

前回に続いて中央水産試験場図書室に残る職員集合写真をご紹介します。この写真（写真1）は「北水試百周年記念誌」に収録されたものです。

戦後、北水試は道立の水産試験場と国立の水産研究所に分離しますが、昭和39年までは、両機関が併置され、北海道区水産研究所の所長が北海道立水産試験場（本場）の場長を兼務するという大

所帯の時代がありました。

写真の大きさは233×278mmで、印画紙のサイズの四切（240×290mm）よりやや小さめですが、127名（男性93名、女性34名）もの人物が写っています。前回紹介した昭和14年の写真と同じ、余市町の旧庁舎正面玄関前での撮影です。庁舎の屋上には屋根が架けられて4階建てとなり、4階の窓

の一部が写っています。また、建物の壁には太平洋戦争時に迷彩色として施された縞模様がくっきりと残っています。

この写真と同時に見つかった、今では非常に珍しい、ガラス製の乾板（写真2）も247×297mmと大きいもので、当時の写真館では定番だったプロ用スタジオ乾板カメラによる撮影と思われました。写真の解像度は非常に良く、人物の表情まで鮮明です。前列には椅子が並べられ、その後ろには少なくとも3段の足場が組まれているようで、本格的な記念写真です。



写真2 ガラス製の乾板（左）と写真（右）及び台紙の文字を拡大（下）

この写真の年代と職員氏名の特定作業は、多くのご健在のOBが含まれていたことから、比較的にスムーズに進み、庁舎内で営業していた床屋さんまで含めて122名と、ほとんどの方の名前が判明しました。

撮影年は昭和30（1955）年で、大垣光平氏の場長就任（昭和29年9月1日）の翌年と、組織的に節目の時期のものでした。

今回は人数も多く、紙面の都合で氏名はご紹介できませんが、現在、この職員写真は中央水産試験場の1階ギャラリーに氏名入りで展示されています。残り5名の方の氏名判明のきっかけになればと思っています。

ところで、この写真が収まっていた台紙には、「酒井写真場」と印刷されています（写真2）。酒

井写真場は、水産試験場から徒歩で10分足らずの富沢町4丁目にありました。

酒井写真場の息子さんで、酒井忠康さんという美術評論家があります。酒井氏は、近代美術史の研究が専門で、神奈川県立近代美術館館長や世田谷美術館館長を務めるなど広く活躍されています。

平成14年には、酒井氏の幼年時の日常的な出来事をつづった小説（童話）5編をまとめた「海にかえる魚」（写真3）が出版されました。

酒井氏と北海道余市高等学校（平成22年4月から北海道余市紅志高等学校に再編）時代の同級生だった、元余市町長の大谷覚氏が、この本を紹介し、中央水試図書室に寄贈して下さいました。

本の表題にもなっている「海にかえる魚」という短編では、水産試験場の一角が幼少期の著者の記憶の「へそ」にあたりと記述されているように、かつての水産試験場の様子が実に生き生きと描写されています。ぜひ、ご一読下さい。

（よしだ ひでお 稚内水試場長
報文番号 B2332）



写真3 「海にかえる魚」（作：酒井忠康、絵：滑川公一、発行所：未知谷、2002）カバーの表紙